

社会学部研究会特別例会（1995年10月16日開催）

パスカルとアウグスティヌス：神学と人間論

パリ・ソルボンヌ大学教授 フィリップ・セリエ
社会学部兼任講師 林 伸一郎（訳）

長い間、後世の者たちは、パスカルを一数学者、物理学者として一素晴らしい学者であると考えてきました。そのような観点からすれば、パスカルは文筆とその才能を、ポール・ロワヤルの友人にして神学者であるアントワヌ・アルノーとピエール・ニコルに貸したに過ぎません。要するに研究者たちはイエズス会士が投げかけた呼び方を受け入れてきたのです。彼らはパスカルを「ポール・ロワヤルの書記官」と呼んだのでした。

ところがここ30年のことなのですが、神学に関して無知なパスカルというこの寓話は崩壊してしまいました。私たちはこの若き物理学者が非常に早くにしっかりとした神学の素養を身につけたことを知っています。25才の時から、つまり1648年のことですが、パスカルはアウグスティヌス主義者の味方であることを、そしてその神学の流れを代表する最も有名な神学者の一人であるイーブルの司教コルネリウス・ジャンセニウスの支持者であることを公にします。彼はルーヴェン大学の神学者たちが編纂した見事な版でアウグスティヌス全集を所有し、それを研究しています。1660年には貧しい人々を救うために自分の蔵書売り払うことにするのですが、聖書と「アウグスティヌス」そしてそれ以外のごくわずかな本だけは手元に残しておくでしょう。

パスカルの作品中のアウグスティヌスからの借用の全貌を見て、驚かされるのは、彼が用いているテキストが非常に多岐に渡っている事です。論争上、必要に迫られて、アルノーとニコルが依拠するのは、主としてアウグスティヌスのペラギウス派論駁の作品（412年から430年の間にまとめられたもの）です。ですから私たちは、例えば彼らが『告白録』（400年頃の作品）を参照することが

どれほど少ないかということを知って驚くのです。パスカルはといえば、確かに恩寵論争に関わってはいましたが、このアウグスティヌスの著作『告白録』から非常に多くを借用しています。彼は、アウグスティヌスの作品という森の中で、そこに散らばっている護教論の部品をいろいろ拾い集めているのです。例えばヴォルシヤヌス宛のすばらしい手紙（137）がその一例です。要するに「プロヴァンシアル」論争の中に身を投じるのは非常によく神学に通じていたアウグスティヌス主義神学者なのです。確かにここで言われるのは、（アレクサンドリアのクレメンスから聖トマスやオッカムのギヨームに至るまで）カトリックの伝統をなしている作品の中で参照できるものすべてを研究したアルノーのような、いわばプロの神学者ではありません。そうではなく、パスカルの場合、聖書や典礼、アウグスティヌスの膨大な作品さらにそれ以外のあらゆる種類の読書をよく消化吸収して、その教養を自家葉籠中のものとするのです。この教養はパスカルの才気煥発とあいまって、彼が基礎神学 (la théologie fondamentale) を一新することを可能にするでしょう。

この発表のねらいは（語の古い意味での）anthropologie すなわち人間論と神学とが『パンセ』においては一つでしかないことを示す点にあります。私たちは三つの段階を踏んで論述を進めることにします。まずパスカル（とアウグスティヌス）が抱いていた墮落 (la Chute) の神学を紹介します。次いで人間のこの腐敗した「状態 (état)」に由来する人間理論を明らかにします。最後に護教論の戦略、つまりパスカルの基礎神学を検討することにしましょう。

第一章 墮落もしくは腐敗 (la corruption) の神学

アウグスティヌスは、聖書の幾つかのテキスト（特に創世記の冒頭部と聖パウロのもの）をまとめて、神は人間を至福、完全、調和の状態に創造したと断言しています。『パンセ』の幾つかの断章は、この夢のような始源の状態を詩的な抒情性をもって思い起こさせてくれます。たとえばある断章は、ちょうどヨブ記の終わりのように、神の英知に次のように語らせています。

「われは汝を形づくった者であり、汝が何ものであるかを汝に教えることのできる唯一の者である。しかし汝はいまではもはや、われが汝を形づくったときの状態にいない。われは人間を清く、汚れなく、完全なものとして創造した。われは人間は光と知恵によって満たした。われはわが栄光とわが驚異を人間に与えた。そのときには、人間の眼は神の威容を見ることができた。そのときには、人間は、彼を盲目にする暗黒のうちにも、彼を苦しめる死の運命や悲惨のうちにもいなかった。だが、人間はかかる大きな栄光を保つことができないで、不遜におちいった。人間は自己を彼自身の中心としたのだ。」¹⁾

無垢の状態においては、人間は神、無限の神への愛を容れる開けでありました。そのような愛が人間の欲求の広大を満たしていたのです。自らの卓越に己を閉ざし、創造者から顔を背け、離れるとき、被造物である人間は永劫の不幸に運命づけられたのでした。実際、

「無限の愛を受け入れることのできるこの偉大な魂のなかに自己自身への愛だけが残ったため、この自己愛は、神への愛が立

ち去った空虚のなかに広がり、溢れ出しました。こうして人間は自分だけを愛し、そして自分のためにすべてを、言い換えますと限りなく愛するようになったのです。」²⁾

第一節：「滅びの群 (la masse de perdition)」と遺棄 (le délaissement)

人間が神を見捨て、するとすぐに神が人間を見捨てた、これがアウグスティヌス主義神学者が「二重の遺棄 (le double délaissement)」と呼んでいるものです。それ以来人類は、自分自身にとりつかれ、漂流物のように漂っています。

「かくのごときが、われわれの真の状態である。(・・・)われわれは渺々たる中間の波間に漂い、つねに定めなく浮動しつつ、一方の端から他方の端へ押し流されている。われわれはいずれかの端にわが身を繋ぎとめ、安定を得たいと思っても、それは揺らめいて、われわれを離れる。われわれが追いつけようとしても、それはわれわれの手を脱れ、滑り落ち、永遠に逃げ去る。なにもものもわれわれのためにとどまっていたはくれない。これはわれわれのにとって自然な状態であるが、しかしわれわれの願うところとはまったく反対の状態である。」
(230—199)

パスカルは「放棄 (abandon)」、「見捨てる (laisser)」³⁾、「状態」または「本性 (nature)」という日常語に正確な神学的意味を与えています。墮落した本性の状態においては人間は欲動や習慣によって「引きずられ (entraînés)」、「運ばれて (emportés)」いきます。人間はあらゆるものに弄ばれるようになりました。ここに何の障害もなくモンテーニュの相対主義が入り込んでくるでしょう。この相対主義は、もはや本当の道徳、正義は

- 1) 断章182-149。さらに断章240-208と断章164-131の末尾を参照のこと。『パンセ』への参照に関して、最初の断章番号は「ガルニエ古典叢書」(セリエ)版(1995年)の番号を、後の番号はラフュマ版(1951年, 1963年)のものを指示している。なお『パンセ』の断章の訳に関しては、主として人文書院『パスカル全集』第三巻所収の『パンセ』(松浪信三郎訳)を参照し、『パンセ』以外の作品に関しては、基本的に現在刊行中の「【メナール版】パスカル全集」(白水社)を参照する。
- 2) 『パスカルからフロラン・ベリエへの手紙』(1651年10月17日)。断章181-148の次の記述を参照のこと；「(・・・)[魂の]この無限の深淵を満たしうるものとしては、無限にして不動な存在、すなわち神自身のほかにないのである。」
- 3) パスカルの「放棄」については、雑誌『古典文学』(Littératures classiques)の20号(1994年1月)に発表した「荒れはてた島に見捨てられた者：『パンセ』における幻想的なものと神学」という論文を参照して頂きたい。

存在しない、社会のただ中で、国家の法律という規約において実質的な力をもっているのは、それぞれの国民の移り変わっていく幻想なのだと主張するものです。「緯度を三度高めると、すべての法律が覆る。子午線一つが真理を決定する。(・・・)法にはそれぞれの時期がある(・・・)。滑稽な正義よ、川ひとすじによって限られるとは！ピレネ山脈のこちら側では真理であることが、向こう側では誤謬なのだ。」(94—60)

しかしながらこのように不確定な状態にあって、人間は「最初の本性の至福にもどろうとする無力な本能」(182—149)をもち続けていました。したがって、「われわれの心を痛ませ、われわれの喉を締めつける一切のわれわれの悲惨を、見せられているにもかかわらず、われわれは自己を高めようとする抑えがたい本能をもっている」(526—633)のです。人間の中には王にふさわしい偉大さが存在し続けています—ニーチェはパスカルのこの王国へのノスタルジーを完全に感じとっていました—。しかし「位を奪われた王」⁴⁾として私たちはさまよひ、皆一緒になって、アウグスティヌスにならってパスカルが「滅びの群」(『初期のキリスト者と今日のキリスト者との比較』)という恐ろしい言葉で指し示すものを形作っているのです。

第二節：神か、被造物か？

このような忌まわしい「状態」にあって、人間は酔いと眩暈とにさいなまれています。人間は、自分の内でその「第一の本性」のささやきに耳を傾けるなら、現世のものはどれも自分を満たすことはできないであろうと確かに感じるのです。パスカルが思い起こさせるのは『告白録』の有名な冒頭部です。そこでは「あなたはあなたに向けて私たちをお造りになりました。そして私たちの心はあなたのうちに休息を見出すまでは、混乱と不安とで揺すぶられ続けるのです」⁵⁾とされているのです。

しかしながら、人間はあまりにも打ちひしがれ、弱いままであるので、善へと高まり続けてそ

こにしっかりと落ち着く事はできません。人間ははかないものに魅惑されるのです。「あらゆる被造物が、人間を悩まし、人間を誘惑する。それらの被造物は、あるいはその力で人間を屈服させ、あるいはその甘美で人間を悦ばせることによって人間を支配している」(182—149)。人間は、被造物からそれること (aversio) によって神へと向かう (conversio) のでなく、神を忘れ、被造物へと急いで駆けつけます。『神の国』(第十四巻第28章)の有名な定式を踏襲して言うなら、人間は、自己を蔑み神を愛する代わりに、神を蔑むまでにいたる自己への愛 (amor proprius) を選んでいるのです。またアウグスティヌスの有名なもう一つの対比を用いると、人間は神を「使用」し、現世を「享受」しているのですが、人間の本当のあり方はこの世を「用い」、神だけを「享受」することであるはずで、だからパスカルは『病の善用を神に求める祈り』(第二節)の中で次のように叫ぶのです。「私は自分の健康を悪用しました。(・・・)あなただけを楽しむために、体の弱さか、愛徳への熱意によって、私が俗世を楽しむことができないようにしてください。」

この自己への度を越した愛すなわち自己愛、それはラ・ロシュフーコーやピエール・ニコルのようなアウグスティヌスの教えを信奉するモラリストたちが追求する主要なテーマなのですが、この愛はさまざまなタイプの不純な感情や悪しき行為へと展開していきます。大抵の場合、アウグスティヌスとパスカルはこの腐敗した過剰な愛を三つの柱にまとめます。それは肉のよろこび、好奇心(見たい、知りたいという常軌を逸した欲求)、そしてこれらの腐敗の最も根本的なものである驕りの三つです。この三つ組は、パスカルが実在の三つの秩序という魅力的な理論を考え出すきっかけとなるでしょう。その秩序は、(肉体が属する)物質的延長の領域、(学問が展開する)知的活動の領域、そして価値を自由に選択する自由選択の領域からなるものです。この選択は、神へと開かれるか、それとも自分が「すべての中心」となろうと意志するか、つまり驕り高ぶるかという選択な

4) 断章148—116、149—117、さらに断章240—248と164—131の末尾参照。

5) アウグスティヌス、『告白録』、第一巻1-1、アルノー・ダンディーによる仏訳からの重訳。『パンセ』断章18—399参照。

のです。⁶⁾ いろいろな哲学はそれぞれこの秩序の一つを説明しています。たとえばストア派の賢者の「自足せん」とする意志は、人間の驕りの一つの現れであるにすぎません。延長と思考との根本的な区別にはデカルトの影響が認められもしたでしょう。しかしそれでもなおこのような力強い世界観が、もともと神学から出たものであることは一目瞭然です。

第三節：キリストの恩寵

人類は無軌道な欲求に委ねられて、滅びへとさまよっていきます。ところが無償であり、被造物の理解を完全に超えた「憐れみ」によって、神はこの腐敗した群のなかに少数の「選ばれた人(élus)」を「選別します(discerner)」。この「選ばれた人」の心の中に、キリストの恩寵が絶大な力を持った魅惑とともに入り込みます。実際、この恩寵は甘さ、甘美、よろこびです。それがはかない被造物の呪縛に、神への愛着を「間違いなく(infailliblement)」置き換えるのです。以上が大変な論争を巻き起こした「二つのよろこび」の理論、または「勝利するよろこび(delectatio victrix)」の理論です。悪はその魅力(たとえば愛情、権力、富などがそれですが)をもっていました。神は人間の心の中に、天に由来する甘さ、現世が知らないよろこび、神への愛の悦楽を拡げて、この悪の魅力を一扫します。その結果、魂はこの愛にうっとりとして酔い、自由にそして幸福を感じつつ神へと駆け出すのです。

ここで明らかなのは、このように精神が神へと向かう運動において、問題となるのは精神ではないということです。この逆説は、すぐあとでパスカルの護教論の地位を検討する際に、我々にとって問題となることでしょう。

さしあたっては、ここまで単にすれ違っただけの諸概念、つまり「精神」「意志」「心情」といった概念をもっと詳しく考察してみる事にしましょう。アウグスティヌスとパスカルは墮落と恩寵の神学に導かれて、その人間論を明確にするのです。

第二章：腐敗した人間の「構成要素」

神によって創造された人間は、自分のもついろいろな能力のハーモニーを奏でていました。というのも彼は本当の「秩序」の中で、つまり自分の創造者との交わりの中で生きていたからです。そのような人間が反抗したとき、被造物の奏でる音楽の演奏が損なわれました。アウグスティヌス主義者が好んで発展させた比喩を使って言うなら、彼は「墜落(tombé)」したのです。「墜落」して、へとへとになり、滑りやすい道を通して暗闇の中をさまよっているのです。

「人間は(・・・)明らかに迷っており、彼の真の場所から失墜したままそれを再び見出すことができないでいる。彼は見透かすことのできない暗黒のなかで、不安にかられて、いたるところにそれを捜し求めているが、何の成果も得られない」⁷⁾

アウグスティヌス主義者が好んだもう一つの神学的なメタファーは、人間という存在が「腐敗」している、損なわれているというものです。

「いかに人間の心はうつろで、汚物に満ちていることか！」(171-139)。

墮落は人間の中に根本的な混乱をもたらしました。墮落してから、人間という存在の異なる部分、つまり認識能力と愛する能力は無秩序に働いて、互いに争うようになりました。

「真理の二つの根原である理性と感覚は、それぞれが真実性を欠いているばかりでなく、相互に欺きあう。感覚はいつもの外観によって理性を欺く。そして、感覚が理性に与えたこの同じ欺瞞を、こんどは逆に感覚が理性から受けることになる。理性が仕返しをするのである。靈魂の情念は、感覚をかきみだし、感覚にいつもの印象を与える。両者はきそって、いつわり、欺きあう。」(78-45)。

これが、パスカルが「欺瞞的諸勢力」と名づける一章の開幕であつたに違いありません。

6) 断章339-308、761-933。

7) 『パンセ』、断章19-400。『告白録』第六巻1-1参照。「私は、(・・・)闇路を歩きながら、あなたを自分の外にさがし、(・・・)見いだすことができませんでした。」

まず私たちの認識能力から見ていきましょう。パスカルは感覚に「批判的〔に見た上での〕信頼」を与え、「感覚による把握は常に真である」⁸⁾と主張するほどでした。感覚の把握は真ですが、ただし三つの留保をつけなくてはなりません。まず「われわれの感覚は極端なものを受けつけない。あまり大きい音はわれわれをつんぼにする。あまり強い光は眼をくらませ」(230—199)ます。第二に、私たちは感覚への所与を解釈する際に、説明に必要な要素をすべて捉えることができるわけではないので間違ふことがあります。その例としてよく採り上げられるのが、水中の棒の例です。しかしとりわけ情念と想像力が私たちの知覚を方向付けているということを考慮しなければなりません。感覚は、示される面はよく見るのですが、その全体を見ないので(78—44)。

[認識能力に対する]批判は、パスカルが人間の中の表層の能力と考える二つの能力に対してずっと辛辣になります。その能力とは想像力と理性のことですが、『パンセ』の中の最も有名な断章の一つでもある「想像力」と名づけられた断章が私たちに見せてくれるのは、その二つの能力の絶えざる争いです。人間の想像力はその正体がはっきりしません。つまり最高のもも最悪のもも作り出すことができるのです。「それは人間におけるあの支配的部分のことであり、誤謬と虚偽のあの女主人のことであり、それはつねに欺くときまっではないだけに、それだけいっそう狡猾である。もしそれが嘘のあやまたぬ基準であったならば、真理のあやまたぬ基準ともなったであろう」⁹⁾想像力は活発で自発的な能力ですが、それが主要な役割を演じるのは、プラトンによって告発された認識様態すなわち臆見においてです。ところで墮落の宇宙においては「臆見は世の女王のようなもの」(546—665)であって、それはたとえこの世界が事実上、力によって圧制的に支配されていたとしても変わることはありません。

絶大な力を誇っているこのライヴァルの前で理性は一体何ができるのでしょうか。理性は無力になり、私たちの実存に関わる領域が問題になる限り、どんなものであっても何かを作り上げる事ができなくなりました。たとえば道徳を練り上げる場合がその例となります(頽廃期のイエズス会士たちは正反対のことを夢見ていたのですが)。理性は、形而上学においても一つの立場を堅持する力をもちません。だからパスカルは神の哲学的証明を軽蔑していたのです。さらに広く言って、哲学者に対してパスカルが痛烈な皮肉を浴びせるのもこの理由からなのです。この「哲学者という」言葉は『パンセ』全体を通して常に軽蔑的な意味を担っています。「われわれは、あらゆる哲学が一時間の労にさえも値するとは思わない」¹⁰⁾パスカルの目に映る哲学的理性はドンキホーテです。

しかしながら人間の鈍重な理性の歩みはゆっくりとしているにもかかわらず、本質的でない仕事に精を出してなかなか進まないという面があるにもかかわらず、その理性が必要不可欠であるような領野が存在しています。それは数学をその支柱とする学問の領域、すなわち精密科学の領域です。パスカルはこの知的活動に素晴らしい小品を捧げました。それが『幾何学的精神について』であり、パスカルはそれについては二つの草稿、いわば二つの「変奏」を残しました。残念なことです。幾何学の論証の完全性が形而上学や道徳においても見出されることは絶対にあり得ません。その上、その完全性は〔幾何学の〕無力を認める理由となる欠陥もっています。つまり理性の進行の出発点である(第一)原理を幾何学的な論証は基礎づけることができないのです。言い換えるなら、われわれの学問はすべて見かけ上は極めて輝かしいものの、水の上にしかな構築されていないものなのです。

さらに人間論という恐ろしい地の底へ降りてい

8) 断章579-701。『第18プロヴァンシアル』参照。「一体どこから私たちは事実の真理性を知るのでしょうか。その正当な審判であるのは、神父様、目であります。」

9) 断章78-44(冒頭)。パスカルによる想像力に関しては、G. フェレルロ、『世の女王、パスカルにおける想像力と習慣』(G. Ferreyrolles, *Les Reines du monde. L'imagination et la coutume chez Pascal*, Paris, Champion, 1995)を参照(この著作はパスカルの想像力についての最も見事な分析である)。

10) 断章118-84(消された文章)。断章27-408、111-76と「哲学者たち」という(反-ストア的な)ファイルの全体を参照。

きましょう。パスカルにおいては認識的でないものはすべて「意志」の領域に属しています。この「意志」という言葉は今日理解されている意味より、ずっと広い意味をもっています。意識的、無意識的なすべての欲求、本能的な反射、私たちの幸福への欲求の基盤となるはっきりとしない生命意欲が意志に含まれます。意志が自由意志と見分けがつかず、決定を司る審級として現れるのは、ただその頂点でのことにすぎません。

意志は墮落によって最も腐敗してしまった能力です。私たちの欲求は抑えがきかず、極度に自己中心的になってしまいました。(石は地に、火は上方に向かうという具合に) それぞれの存在はそれぞれ固有の場所へと向かうというアリストテレスの理論を踏襲して、アウグスティヌスとパスカルは腐敗した意志を低きもの、地によって引きつけられていて、「その本当の場所」(19—400)である神については、もはやそのノスタルジーしかもっていないものとして示します。今や意志は邪欲つまり興奮し狂騒状態にある欲求に侵されているのです。ところでそのような邪欲の支配は壊滅的なものです。というも意志はあらゆる人間活動を支配しているからです。意志は私たちの認識活動を下から支え、操縦しています。意志は知性を自分の好む対象へは向けるのですが、自分が気に入らない対象となるとそのすべてから知性をそらしませ(458—539)。このようにして私たちの生における「気晴らし (divertissement)」の重要性が説明されます。私たちは次から次へと本質的でない関心事を渡り歩き、それで時間を浪費して止みません。そのような関心事とは(ダンスや狩りといった)単なる気散じであるでしょうし、キャリアへの情熱¹¹⁾であることもあるでしょうし、さらには学識を積むことや学問ですらあることでしよう(196—164)。結局のところ、人間が力に服さなければならない場合を除きますと、意志は人間のあらゆる行為の責任を負うものなのです。そこで次のような格律が示されるのです。「邪欲と力とは、われわれのあらゆる行為のみなもとである。邪欲は意志的な行為をさせ、力は意志的でない行為を

行う」(131—97)。こうして私たちがよく考えずに行った行為も、パスカルにとっては全く意志的な行為なのです。それは人間を支配している、道を踏み外した情動的なダイナミズムから生じるものなのです。

パスカルはこの点で自分を反—ソクラテスとして認めます。パスカルにとって一人一人の人間が悪しきものであるのは、(無知によってではなく)まさに自分の意志によってなのです。

以上で人間を構成している「構成要素」の目録作りを終りにすることができるのでしょうか。決してそんなことはありません。というもこれから私たちはパスカルの人間論のもっとも独創的な二つの側面に言及しなければならないからです。

まずパスカルは、習慣の力についてのアウグスティヌスの反省とデカルトの機械論とに着想を得て、「機械 (la machine)」についての紛れもない一つの理論を作り上げました。人間は身体と心理作用の一部で動物界に浸っています。それゆえ人間は機械的に作動しているのです。(パスカルは動物—機械というデカルトの概念を採り入れています。)ところでこの機械的な動き方は、習慣が創り出す調教の力によって、墮落した人間の中でそれからは逃れているはずの領域、例えば精神の活動や宗教の信仰にも広がることがあります。『パンセ』は、例えば次のような逆説的な格律を示して、習慣の働きを非常に強調したのでした。「信仰に慣れる者は、それを信じる」(680—419)。習慣もまた世の女王であり、大多数の宗教が存在し続けているのも、もっぱら(思考や行為の)習慣の偽善的な圧力のゆえなのです。

このような一覧表の全体は、ここまでのところ人間にとっておよそ励ましとなるようなものではありません。この表は、アンリ・グイエのある著書のタイトルに従えば、パスカルの「反—人間中心主義 (anti-humanisme)」を明らかにしているのです。ところが反から正への転換を行いうるような一つの根本概念が現れます。それが「心情 (le coeur)」という概念です。

なんと驚くべき概念でしょうか。確かにその起

11) このパスカルのテーマはトルストイによって、その『イヴァン・イリッチの死』の中で見事にまとめあげられている。トルストイはパスカルを糧としているのであり、そのことはボリス・タラソフ教授の仕事が示すとおりである。

源は、この言葉が千回以上も用いられている聖書、そしてアウグスティヌスに求めることができるでしょう。しかしすぐに意表を突く定式に突き当たるのです。「神を感じるの、心情であって、理性ではない。信仰とはそのようなものである。理性にではなく、心情に感じられる神」(680—424)。このようなテキストが明らかにしているのは、心情は認識の一つの審級であるということです。つまり心情は内密で直接的で証明できない確実性の座なのです。そのような「心情による」認識は本質的です。というもそれらは（「存在」、「三次元」、「全体は部分より大きい」というような第一原理として）他のあらゆる認識の出発点となるからであるし、また（あらゆる種類の直観として）生の活動を司っているからであるし、更には人間にとってもっとも重要なもの、つまりその運命を明らかにするものでもあるからです。心情は、このように広い範囲に及ぶ認識活動の他に、意志の全体を含み、道徳意識を包括しています。

要するに、心情は、最も深い（認識の、そして情動の）ダイナミズムにおいて捉えられた人間を、すなわち私たちの本当の存在を表すものなのです。宗教という視点からいうなら、心情は人間の本質であり、無限なるもの、絶対なるものの能力です。テーマとして考えたとき、心情は動きをもち、躍動に満ちていて、具体的な描写を要し、暖かさに溢れたものですが、そのような「心情」と「靈魂」との関係はアブラハムの神と哲学者の神との関係に等しいものです。

パスカルのキリスト教護教論は、まさに以上で見たきたような構成をもち、統一性を殆どもたず、揺られていると彼が見なしている対話者に向けて書かれました。一つの神学から生まれ出たこの人間論が、今度は一つの神学を生み出すこととなります。

第三章：基礎神学の戦略

周知のように「基礎神学」という名称が、かなり評判が悪かった「護教論 (apologétique)」とい

う名称に置き換わりました。ところでこの言葉の変化とその実体の変化とは相伴っているものです。護教論は、神は知られていないが、それを見出すことは容易いことだという素朴な確信をその指針とする皮相な論争へとしばしば墮してしまいました。このような文脈で、ジャン・ブシェ (Jean Boucher) の『キリスト教の勝利、366の問題の解決をその内容とする』(1628) という本のタイトルが説明されるのです。そのタイトルはパスカルも知っているものでした。それに対して基礎神学が明らかにするのは、絶対者を信じるように自分を仕向けた理由を深く求めていく知性の歩みです。パスカルにおいてこの歩みは『告白録』に記されたアウグスティヌスの経験、つまりこの世の喧噪の中では、さまざまな教説が入り乱れている所では、神を見出すことは難しいという経験から始まります。[パスカルの] 主観は自分が同じ探究に完全に踏み出していると感じています。そのことがテキスト中に第一人称の文体を出現させているのです。『パンセ』の著者は夢中になり、憤慨し、驚嘆します。彼のキリスト賛美は、その熱い抒情性によってレオン・ブランシュヴィックのような不可知論者を驚かせたのでした。預言の議論へ訴えた後で、パスカルは次のように叫んでいます。「かくして、私は私の救い主に両腕をさしのべる。彼は四千年のあいだ予言されたのち、予言されていたとおりの時期に、またそのとおりの一切の事情のもとに、私に代わって苦しみかつ死ぬために地上に來り給うた」(646—793)。今日、基礎神学の著作においてさえ、どれだけの神学者が敢えてこのように書くでしょうか。

パスカルの企てはすべて、中心となるある確信、つまり「神はお隠れになっている」「隠れたる神」という確信の周りを回っています。ここで問題となっているテーマは、護教論者パスカルが決定的な光を与えたものです。そしてそれは、カール・バルトの『教義学』の中に「神の匿名 (l'incognito de Dieu)」というタイトルで再び姿を見せるでしょう。¹²⁾ 言うまでもなくこの考えは、一つの神学に、つまり「破滅の群」と少数の選民

12) エレーヌ・ミションの注目すべき作品『心情の秩序、パスカルの『パンセ』における哲学、神学、そして神秘思想』(Hélène Michon, *L'ordre du coeur Philosophie, théologie et mystique dans les "Pensées" de Pascal*, Paris, Champion, 1996) 参照。

を説く神学に由来しています。大部分の人間は見捨てられていると感じて、この世のはかない誘惑に身を委ねるのですが、この世がその期待を裏切るものであることは明らかです。人間は薄暗がりの中を歩んでいます。そこは全くの闇の中ではありません。原初の本性が発している、ほとんど聞こえぬほどの声が、別の王国があり得ることを示す痕跡をいたるところに発見させてくれるからです。だからこそさまざまな文化の中で、神の問題が力説されているのです。しかしまた自分自身の力だけに頼るようになった人間は、完全な明るみを見出すこともありません。宇宙は、彼らが心を定めて、平安な確信の中で安らうことができるほどには明るくもなく、暗くもないのです。

この「隠れたる神」というテーマの輝きが（アウグスティヌスにおいてはそうではないのに）パスカルにおいてそれほどはっきりと認められたのには、二つの理由があります。まず第一に聖体のポール・ロワヤル（Port-Royal du Saint-Sacrement）の作家であるパスカルは、聖体についての集中した瞑想をその思想の源としていました。聖体について思いを深めることはこの修道院の特徴をなしています。この目の前の聖体の内に、見分けることはできないもののキリストが現存しているということ、この「不思議な秘密」はカトリック信者に神の慎みと、いわばそのふるまい方を明かすのです。第二に、パスカルは「隠れたる神」を普遍的な解釈原理としました。パスカルが教皇の無謬性を拒否するのもそのためです。というのもそれはあまりにも明らかなことでしょうから。ポール・ロワヤルにとって唯一無謬な決定者である神は、公会議の混乱や論争の中にずっとうまく姿を隠しているものなのです。

このようにお隠れになっている神が、どのようにして人間を構成する本質的な要素を「整えて」、自分と出会うようにさせるのでしょうか。

第一節：君は何を欲するのか？

パスカルのように、知性に対する意志の優位を確信している神学者にとって、このような問いこそ重要な問題に思われるのです。しかし人間存在の情動性（*affectivité*）を変えるために、護教論者にできることは一体何でしょう。できることはほとんど何もありません。それはアウグスティヌスの教えに次いで、精神分析学が再び確認したことです。

護教論者が行うことのできる最初のことは、その対話者に、彼について、その実存について、彼の未来について語ることによって、その人の関心を惹こうとすることです。その仕事は、本当の *Protrepitique*¹³⁾、つまり本質的なものへと向かうための励まし（681—427）から始まらなければならなかったのです。不信仰者との対話に何らかの成功の見込みがあるためには、最小限の共通理解、心の一致が必要です。パスカルもまた、彼が語りかけようとしている人の心の中に問いかけ、不安、そして待望が現実存在している事を前もって確認してからでなくでは、キリスト教信仰について語ろうとはしませんでした。¹⁴⁾ 本当に関心をもった人と対話しようというこの心配りは、予定されていた二部構成の作品『キリスト教護教論』の第一部が「人間についての認識」と題されていることを説明する際の助けとなります。その第一部においては、パスカルは自分が親炙していた思想家たち（モンテーニュ、シャロン、デカルト）の分析を用いてリベルタンに、彼自身の姿を提示してみせるのです。「空虚」「悲惨」「倦怠」といった最初のファイルは、この世の誘惑の中に自分が追い求めるべき宝があると考えることが空しいことであるということを確認するはずのものでした。

人間の情動性を「働かせる」方法はまだあります。まずもっとも有名な思想家の作品を読ませることによって、つまりアウグスティヌスが実験し

13) 訳注：Protrepitique（哲学の勧め）はギリシア—ローマ時代の散文形式で、哲学へと導くための励ましを内実とする文学ジャンルの一つ。このジャンルの中で有名な古典としてはアリストテレスの『哲学の勧め』がある。キケロの『ホルテンシウス』はアリストテレスの作品をモデルとした「哲学の勧め」であるが、キケロは形式を変え対話形式とした。若きアウグスティヌスはこの書によって哲学へと導かれたのであった。cf. *The Oxford Classical Dictionary*, Oxford, Clarendon press, 1949.

14) この点に関しては「パスカルの護教論の始まり」という私の論文を参照していただきたい。（『17世紀』誌（*XVIIème siècle*）、1992年、10-12月、177号）

てみたようにプラトン主義者の作品を読ませることによって、真理と正義の追求に親しませることです。「プラトンを、キリスト教への準備のために」(505—612)。次いで、喜ばせる術、文学的な魔術に頼って、揺さぶり、魅惑することです。この点に関してパスカルは異教徒の修辞家たちには目もくれず、聖書から直接に吹き込まれた技術と文体のすべてを活用しています。「神は神についてうまく語る」(334—303) のですから、どんな護教家も神の修辞をまねて語るよりうまく語ることはできないのです。

しかしたとえこれらのことがすべてなされても、それでもなお情動性を正しく整えること、つまり人間的な事物ではもの足りないという、いやましに大きくなっていく感情を起こすことは、結局のところ、神一人のわざです。パスカルは好んで『詩篇』119の祈りを引用します。「神よ、あなたの定めに心を傾けるようにしてください」(412—380)。彼はまた「愛によってのみ人は真理へと入る」というアウグスティヌスの言葉を繰り返すのです(412—380)¹⁵⁾。

第二節：「信じるために理解する」

アウグスティヌスのこの定式はイザヤ書(VII、9 [七十人訳聖書での区分])から着想を得たもう一つの定式によって補われなくてはなりません。「理解するためには信じなければならぬ」という定式がそれです。ミラノの回心者アウグスティヌスはもがき苦しんだ末に、理性の不確かさと信仰がどれほどすばやく彼を照らしたのかということに気づいたのでした。だから彼はキリストに帰依することで知性が照明されるということを非常に強調したのです。ではアウグスティヌスは信仰絶対主義者であるということになるのでしょうか。つまり彼は、キリスト教信仰とは人間に不意に出会うものであり、知性の活動には全く依存せず、ただ証言されるだけのものであると確信しているのでしょうか。決してそうではありません。確かに信仰は証言から生まれます。私たちはキリストに連れ添っていた人々の言うことを信じています。では私たちが、彼らを幻を見た者もしくは

ベテン師と考えずに、信頼を寄せるのはなぜなのでしょう。ここまで来て初めて理性の最も厳密な命令が必要となります。

理性には三つの任務があります。まず理性自身の働きの限界を定めること(パスカルはこの点でカントを予告しています)、次いで証人と証言とを厳密に検査すること、そして最後に啓示と「人間の学問」が矛盾しないことを確かめること、この三つです。パスカルはそのファイルの一つを「理性の服従と運用、その点に本当のキリスト教がある」と名づけました。彼は、理性が哲学や道徳の領域ではぐらついていると断じています。その代わりに理性が有効に働くことができる領域においては理性を使用することを求めているのです。その領域とはつまり「人間という事実と歴史という事実」(ジャン・メナール)に関する領域のことです。このような事実に関しては、極めて厳密な批判的検討を行わずに知性が服従することはあってはなりません。人間は超越の徴をいたるところに細心の注意を払って求めなくてはならないのです。

そのような調査は、もしそれに神が連れ添ってくださるなら、人間をキリストへと導くでしょう。そしてそうなったら、イエスの変容という福音書のエピソードが示したように、キリストによる神の啓示を崇めれば充分でしょう。「神のこぼれを聞け」(164—131)とパスカルは言っています。この段階に至ってパスカルはアウグスティヌスに暇を出します。つまり彼はこうして啓示された「神秘」を深めようとする誘惑を拒むのです。ポール・ロワヤルの他の神学者もそうなのですが、パスカルは〔アウグスティヌスの〕『三位一体論』のような本がその理解を助けるものとは信じていません。原罪の理論は絶対に「理解不可能」なのです(164—131)。聖体におけるキリストの実在的現存は「何にもまして不可解で晦冥な神秘」(『パスカルからロアネーズ嬢への手紙』その四)として現れます。しかしながら、パスカルは皮肉って次のように言っています。「聖体を信じないというような愚かさを私は憎む。福音が真実であり、イエス・キリストが神であるならば、そこ

15) 『幾何学的精神』の草稿の一方、つまり、「説得術について」の冒頭参照。また断章300—269の次の文章を参照のこと。「人間の善がその肉体にあると信じている人々」私は彼らに対しては何もできない。

に何の困難が存在するであろうか」(199—168)。ひとたびキリストの神性が見出されると、あとは現世の闇の中にキリストが広める「天上からの光」(240—208)を崇めさえすればよいのです。

知識をもたず、そのような調査を行うことができない人間についてはどうでしょうか。彼らの帰依は決して理性を欠いているわけではありません。確かに彼らは歴史についての調査にはほとんどついていけないのですが、啓示と自分自身の人間的経験がよく合致していることを捉え、キリスト教の霊的、道徳的なダイナミズムを超えるものは何もない(413—381)ということを見出します。彼らの知性の歩みは幾何学的タイプのゆっくりとした推論に属するものではありません。それは理性の閃きから生じうるのであって、その理性は「少なくともある程度までは、一目で」さまざまな徴のおりなす複雑さを捉えるのです。パスカルはそれを「繊細の精神」(670—512)と呼んでいます。彼らの信仰とはといえば、さらに深く、直観にして愛である「心情」から現れるのです。(142—110)。

第三節：「機械」を支配すること

この信仰への歩みに身体は無関係ではありません。既に見たように、アウグスティヌスの後で、パスカルは習慣のもつ陰険な力から強烈な印象を受けています。日々、自分をすべての中心として活動している者は神の遠慮がちな声を聞くことはほとんどありません。護教論者パスカルは、理性が身体と心理的な習慣の影響を被っていないと想像することがどれほど素朴なことか、その対話者に理解させるつもりでした。それが有名な「賭け」の断章での争点ですが、この断章の本当のタイトルは「機械についての論述」というのです。その論述の出発点では、無信仰者が神の存在に賭けるなら、すべてを得るにちがいないということを彼に納得させる必要がありました。そして彼が身につけているキリスト教的でない習慣を変え、神の働きかけがあったときにそれを受けとめることができるようにしておかなければならないという結論に到らせる必要があったのです。それゆえ、彼はキリスト教の習慣を身につけなくてはなりません。[そうしたからといって]一体彼は何を危険に

さらすというのでしょうか。それが有名な「動物のように従順になれ」ということの意味なのです。この言葉について非常に多くの研究がなされたのですが、実は大した意味をもっているわけではないのです。それが意味しているのは、あなたは、自分自身の一部が「調教」の対象であることを知っている。そうであるなら自分の習慣をよく考えて選び、自分が意志したメカニズムを作動させよ。あなたは馬を調教することができる、先ず自分自身を、動物界に沈み込んでいる自分を調教せよ、ということなのです。

この戦略は再びパスカルをアウグスティヌスから隔てることとなります。十分すぎるほどよく知られていることなのですが、アウグスティヌスは、「回心させる」ための方法として暴力に頼って異端者の習慣を断ち切ることによい方法を見出さませんでした。彼の陰鬱な「ヴィンケンティウスへの手紙」(書簡93)は、聖バルテルミーの虐殺の時(1572)とナント勅令の廃止の時(1685)に再び出版されることになったのです。パスカルとはといえば、あらゆる外的圧力をきっぱりと拒否します。信仰を得ることは自由で、内密で、私的な行為なのです。(203—172)

結びにかえて

人間論と基礎神学とのさまざまな関係がこのように明らかにされてみると、結論を出す前にしておかなくてはならないのは、護教論者パスカルが抛り所にしようと思っていた四つの「基礎」をごく短く概観してみることです。その最初の二つは、知識のない者でも近づくことができる基礎、つまり人間が持っているいろいろな矛盾とキリスト教の理想が持っている魅力です。後の二つは、ある教養を前提とするものであって、「イスラエルの神秘」と[旧約の]預言と福音書の調和であるはずでした。これらの「基礎」を提示するにあたって、パスカルは論述を線のように連ねることを拒み、唯一の中心すなわちキリストを巡る引力によって作られる音楽的で魔法の呪文のような構成を考えていました。

この「心の秩序」のモデルは、聖書とアウグスティヌスの『告白録』です。この四つの「基礎」

に関する省察のかなりの部分は、同じアウグスティヌスが宗教について行った考察に由来しています。しかしパスカルはすべてを採りあげ直し、批判を加えることもしばしばです。人間論に関しては、私たちはそれがどれほど恩寵の神学に出自をもつものであるかを見ました。つまり『パンセ』の全体はまさに神学という基盤の上に乗っているのです。それは、『パンセ』のポッシュによる校訂版（1779）やブランシュヴィックによる校訂版（1897）がもたらし得たようなパスカルの説明、つまり「宗教を前提としない (laïque)」説明が幻想であるということです。今日では、護教論者パスカルはスコラ神学の時代を飛び越えて文学的神学 (une théologie littéraire) と再び手を結んだ神学者—作家として考えられています。パスカルの護教論の戦略の新しさは、ニューマン¹⁶⁾とともに彼を基礎神学を作りだした者、その創設者の一人とさえするのです。

16) 訳注：ニューマン：John Henry Newman (1801-90)。イギリスのカトリック神学者、枢機卿。1845年に英国国教会からカトリックに改宗。ローマへ行き、司祭に任じられる。帰国後、文学史上の〈カトリック復興〉に刺激を与え、G. K. チェスタトン、G. グリーンら、改宗者の文学活動の礎を築いた。イギリス・オラトリオ教会の創設者でもある。著書は、『キリスト教教義の発展』(1845)、『アポロギア』(1864) など多数 (平凡社『大百科事典』参照)。